母の部屋

津村節子

母の部屋

津村節子

集英社

母の部屋

一九八二年六月二五日　第一刷印刷
一九八二年七月一〇日　第一刷発行

定価　九八〇円

著者　津村節子

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部二三八―二八四二
販売部二三八―二七八一
印刷所　凸版印刷株式会社
検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えいたします。
© 1982 Setsuko Tsumura
Printed in Japan 0093―772387―3041

母の部屋＊目次

母の部屋 7
見知らぬ町 41
みのむし 63
雪の町 99
酢橘 121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

五階の窓 153
青あらし 173
百舌 193
旅仕度 221

装画　佐々亮暎
装丁　後藤市三

母の部屋

母の部屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

息を切らせて走って来た珠子は、小さな運動靴を爪立て、せいいっぱいブザーに手を伸した。先週帰って来た時には押せたのに、今日は漸く指先が触れただけで、力を入れぬうちに足許がふらついてしまう。

二度、三度試みたが、辛うじてブザーに触れるだけだった。一週間前よりも背が低くなったのか、と口惜しかったが、焦るほどかえってうまくいかない。あきらめてこれまでしていたように飛び上って押すと、二度目に部屋の中で、確にブザーの鳴る音がした。

だが、母は出て来ない。さして広くもないマンションだから、聞えぬ筈はないのだが、何度鳴らしても反応はなかった。

珠子はがっかりして、コンクリートの廊下にしゃがみ込んだ。母は、珠子が帰って来る土曜日にも出掛けていることがある。よほど遅くなるときは、珠子が預けられている川崎えいの家へ電話をかけてきて、帰りがけに迎えに寄ってくれるが、連絡がない時でも、かなり長時間ド

アの外で待たされることがあった。
夕方の買物から帰って来た女が、珠子の待ちくたびれた姿に目をとめて、
「おや、今日もお母さんはお出かけ？」
と声をかけた。その手にぶら下るように、自分と同じ年恰好の女の子がつかまっていたので、珠子は返事もせずそっぽを向いた。
長い間しゃがんでいて、足がしびれてきた珠子は、コンクリートの廊下に尻をつけて坐り、膝を抱え込んだ。メリヤスのパンツを通して、コンクリートの冷たさが伝わってくる。腹も空いてきて、珠子は泣きたくなった。
その時、ドアの内で声がした。女の声は母で、相手は男である。
チェーンをはずす音がして、鉄製のドアのノブが廻った。珠子は立上って、ドアの傍から飛びのいた。
母の、華やいだ声に送られて、学生のような若い男が出て来た。母の許に来る男客は多いが、一度も見たことのない顔であった。
男は、目の前に竦んだように立っている幼女を見つめた
「あら、お帰り」
母は、いま帰って来たと思っているらしいのが、珠子は不満であった。さっきブザーを何度も鳴らしたのに、と言いたかったが、初対面の男の前では固くなってしまい、口に出せなかった。

「きみによく似ているね」
男は母をふり返って言った。
「そう？　姉の子なのよ。預っているの」
母が思いがけぬことを言ったので、珠子は驚いて母の顔を見た。
「へえ――、お姉さんはどうしたの」
男は訝しそうに言った。
「死んでしまったの。男手だけでは育てられないでしょう？　だから――」
そんな話は、聞いたことがなかったが、もしかすると本当なのかもしれない、と珠子は思った。
母に連れられて買物に行ったりすると、お姉ちゃんと一緒でいいね、などと言われることがある。珠子を指して、お妹さん？　と母に問う者もあった。
その日の母は、とりわけ若く見えた。横からわけたくせのない髪を、肩に触れるくらいに切り揃え、素顔に明るいピンクの口紅だけさしていた。真赤なTシャツにGパンをはいている。母は少年のような腰をしていて、Gパンが似合うことが自慢であった。
男は、母と珠子を見較べて、
「ふうん、姉さんの子か」
と言ったが、別に関心を抱いたふうもなく、大股でエレベーターの方へ歩いて行った。
「ブザー、鳴らしたんだけど」

珠子は母を見上げ、抗議するように言った。
「聞えなかったわ。何度も鳴らさなきゃ駄目よ」
母は聞えなかったことを、珠子のせいにしている。
「何度も鳴らした」
珠子は言ってみたが、取り合ってくれなかった。
食卓の上には、ビール壜や、汚れたグラスや、吸殻が盛り上っている灰皿などが乱雑に置かれているだけで、食事の仕度は何も出来ていなかった。
「おなか空いた」
珠子が訴えると、母は面倒臭そうに、
「お三時出なかったの？」
と言った。お三時と言っても、えいの家で出るのは、牛乳一本きりである。
母は冷蔵庫をのぞいていたが、手早く残り物と冷飯で焼飯を作った。むさぼるように食べる珠子を、眉をひそめて見ながら、
「七時からお客さんよ。御飯が済んだら自分の部屋へ行っていてね」
と言う。
珠子は、夕飯が済んだらテレビを観るのを楽しみにしていた。えいの家のテレビはカラーではなかったし、古くて映像も鮮明ではない。それに、えいの好きな番組は時代劇やホームドラマで、子供向きのものは見せて貰えない。土曜日に家に帰って、自分で好きなチャンネルを廻

せることが、一週間のうちで一番の楽しみなのに、それさえ母は奪おうとしている。

珠子の部屋は、玄関わきの四畳ばかりの板敷きの部屋で、木製の小さなベッドと、父が林檎箱に包装紙を貼ってくれた玩具箱が置かれてあるきりである。玩具も、母に買って貰ったものは少く、殆ど父が買って来たものである。

去年の秋までは、父も、このマンションで暮しており、珠子は、えいの家ではなく私設の託児所に預けられていた。もっとも、今のように預けられ放しではなくて、夕方には家に帰ることが出来た。母が夕食の買物の時に迎えに来たが、母の都合の悪い時には、父が会社の帰りに寄ってくれた。

母の仲間たちの会合のある日には、父と外で食事をしたり、銭湯やパチンコ屋で時間を潰した。会合は、テレビが据えられている居間兼食堂を使うので、父と珠子は居る場所がないのだ。子供連れでは夜遅くまで過せる場所もなく、十時頃には帰宅するが、その頃は酒になっていて、部屋には煙草の煙が充満し、酔のために声高になった人々が、傍若無人に喋り合っている。そんな中で、母は異様に眼を輝かせ、頬を紅潮させているのが、珠子には別人のように見えた。

母が何か言うと、男たちはおもねるように同調したり、母を刺戟するような反対意見を口にしたりする。女は母の他に二、三人いたが、その中で母が一番美しく、いきいきしているのが珠子には誇らしく思えた。会合も、母を中心にしているような雰囲気が感じられ、それも珠子に満足感を与えていた。

父と珠子は、会合の邪魔にならぬように、それぞれの部屋へ行く。母たちが占領している部屋のほかには、珠子の部屋と、ダブルベッドを置いた六畳の和室しかない。

居間からは、いつまでも話声や笑声が聞えてきて、珠子は眠れない。起き出して父の様子を見に行くと、ヘッドホーンをしてステレオを聴いている。ヘッドホーンで耳を覆い、ドアに背を向けて坐り込んでしまった父は、もう何を言っても聞えない。自分一人の世界に閉じ籠ってしまうのだ。

そんな時、珠子は自分は誰にも愛されていない余計者のような気がして、たまらなく淋しくなるのだった。

母は、食卓の上のものを流しの洗い桶の中に漬けると、ありったけのコップを出し、椅子が足りないので、床の上に座蒲団を敷き並べている。そうしているうちにもブザーが鳴り、つぎつぎにいつもの顔ぶれが集ってくる。

「さあ、あっちへ行っていらっしゃいったら」

母は、未練がましくテレビの傍に貼りついている珠子を追い立てた。

「いいじゃないの。一週間に一度しか帰って来ないんだから、ここに居させてあげたら？」

「ひどいママだわねえ。別に邪魔になるわけじゃなし、眠くなるまでここにいらっしゃい」

女たちは、珠子を不憫がって口々に言う。

「子供が、大人の時間にはいり込むのはだらしがなくて嫌なのよ。けじめをつけないとね」

「けじめなんて恰好いいこと言って、邪魔なんでしょ。なにせこの人は、書いている時に泣か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com